

個性を使ったスポーツが流行らないのは何故なのか

アママサ二次創作

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超常黎明以降。多くのスポーツが衰退し。

それに取つて代わるよう『ヒーローによるヴィラン退治』が取り沙汰されるようになった。

だが!! スポーツの芽は潰えていない!!

今もなお、スポーツで人々を沸かせる者達が、世界には存在しているのである!!

ということでスポーツがヒーローに取つて代わられて衰退した世界で、個性を使用したスポーツがどのようにして考案され、どうやって法律をかいぐっているのか、という話です。

主人公はこの後雄英の普通科に行つてヒーロー科をボコボコにしてヒーロー科に勧誘されたりされなかつたり。ヴィラン連合に接触されるけど『こいつただのスポーツ馬鹿だ』つてなつて強くてめんどくさいの日本から出て行けされたりするかもしません。

* * * * *

目
次

個性を使ったスポーツが流行らないのは何故なのか

個性を使つたスポーツが流行らないのは何故なのか

個性伝来以降、多くのスポーツがすたれた。

それも当然といえば当然。

例え個性の使用 자체を禁止することでスポーツの体を保とうとしても『異形型』という存在によつて『スポーツの平等性』という根底が覆され。

その華やかさやかつこよさによつて人々に憧れと夢と希望を与えていた役回りは虚飾のヒーローによつて奪われた。

「だが!! スポーツとは日々進化し続けるものなのである!!」

「うるせーぞ口キ! 準備出来たら黙つてろや!!」

俺は口キ。もちろん偽名である。

そして俺の頭を勢いよく叩いたこつちはおでん。オーデインだかオーデンだかどこかの神話の神らしいがそんなことは知らん! こいつなんておでんで十分だ!

「……はあ」

いつになく荒れている口キにため息をついているこいつはソーカ。苦労人だ。俺は断じて荒れてなどいないし迷惑もかけてない。

そんな話をしているうちに、アナウンスとともに目の前のゲートを開いていく。

『さあ選手の紹介だ!! レイクキャッスルから出撃するは北欧の神々
!! アースガルズ!!』

アナウンスの声と同時にゲートの外へと歩み出た俺たちは、大歓声をあげている観客席へと手を振る。こんなでも俺たちはプロアスリート。それもトップクラスとは言わないものの、派手さと顔の良さ(流石に自分で言うのはどうかと思うが、本当にそう言われているのだから仕方ない)でかなり人気のある方だ。

続けて対戦相手のチームが9チーム紹介され、カウントダウンが始まる。

あのカウントダウンが終わると同時にゲームがスタート。俺たちは拠点であるここを飛び出し、直径2キロのこのエリアを駆け抜けて

敵と戦うことになる。

血が騒ぎ、脳が踊る。戦いのときが来たのだと肌が粟立つ。

それらを全て上がりそうになる口角に込めて、そのときスタートを待つ。

そうして。

今日もまた、俺たちの遊びたたかいが始まるのだ。

いつたい何をやつているかつて？

個性ありの陣取り合戦。『アビリティ・ウォー』。

サイフ高のスポーツだ。

* * * * *

時は超常全盛期。

超常黎明以降あまたのスポーツが衰退し、ヒーローという存在に取つて代わられた。人々はプロスポーツリーグを見るのをやめてヒーローの戦闘を見ては歓声を上げ。コロシアムに詰めかける代わりに街中で行われるヴィランショーン退治へと足を向ける。

まあそれも仕方ないと言え巴方ない。個性を使わない人間同士のスポーツよりも、個性を使つたヴィラン退治の方が派手なのだから。

では何故。

『個性の利用を前提としたスポーツが考案されなかつたのか』。

身障者へ向けられる視線が増えたことによつて、身障者用にカスタマイズされたスポーツが数多く考案され、例え障害を抱えていてもスポーツができるようになつた。

テニスという1つの種目を元にして、スカッシュやパデルなど新たなスポーツが生み出されたという歴史もある。

そう。本来スポーツとは、その時々の時世やニーズに合わせて新しく生まれていくようなものなのだ。

それが生まれなかつたのは。

ひとえに、それが都合が悪かつたからである。

誰にとつてか？

そんなもの決まっている。

個性の暴力によつて『支配したい』ヴィランと。個性の暴力によつて『治安を維持したい』ヒーローだ。なぜなら奴らにとつて、個性スポーツによつて一般人が実力をつけるのは面白くなかったから。

超常黎明期に勢力を二分したこの2つの勢力によつて個性スポーツの出現は抑制され、その後はヒーローとヴィランの戦いが人々の闘争本能という避けがたい欲求を満たしてきた。

だが。

それで。

『上に立つ奴らの思惑に踊らされてやる』者ばかりではないのだ。大半の国で、個性の私的な利用や趣味への利用は大部分規制されている。それを人に向けるなんてもつての他だ。

つまり、個性を利用したスポーツなんて生まれようが無い。

そこに風穴を開けたのは『ヴィオ&テック社』。アメリカの、ヒーロー向けのサポートアイテムやコスチュームを開発していた会社である。

超常黎明と同時に産声を上げた中小企業は、個性社会の発展と同時に世界最大規模の企業へと成長を遂げ。彼らはあろうことか『国を作った』のである。

そう、国だ。

といつてもアメリカや日本に対抗できるようないそれたものではない。せいぜいが市民の住む居住区と観光客のリゾートエリア。そしてこの国の産業の目玉となるスポーツエリアがある程度の小さな島国だ。その市民だつて、言つてみればテック社の従業員。スポーツエリアと飲食業を回すための

だが。

独立した国になつたことで、その国はアメリカや日本、中国やヨーロッパといった『個性の利用を制限する』国家の枠組みから抜け出したのである。

つまりこの国では、個性をスポーツに使うことが犯罪ではないの

だ。むしろスポーツに関しては国を上げて奨励されている。一方で街中で人を傷つけたり建造物を壊したりするのは厳しく禁じられているので、個性による犯罪というのもほとんどない。特にアスリートの側なんて厳しい審査をくぐり抜けているのでまともな人間ばかりなのだ。たまに馬鹿をやる観客がいるが、アスリートもいるので速攻で取り押さえられている。

「そうやつて出来たのが、このグリードアイランドってことだ。わかつた？」

「うーん、むずかしくてわかんない!!」

「ま、ここなら個性を使つたスポーツが楽しめるつてことよ。かつこよかつただろ？」

「うん！　お兄ちゃんかっこよかつた！」

久方ぶりにグリードアイランドへと戻つてきて、よく組むチームメイトと試合を2つほどこなし。今はひと休憩と夜の屋台街へと足を伸ばしていた。ちなみにこの国では、深夜は流石に無いもののナイターゲームは普通に行われているので今もいろんなスポーツが行われており、それに観客が歓声を上げているだろう。

そんな中で野外のテーブルについてピザとコーラを食らつているところに、迷子なのかなんなのか、この少女が物欲しそうなめでピザを眺めてきたので食事の席へ招待したのである。

「お兄ちゃんがしてたスポーツ、なんていうの？」

「あれは『アビリティ・ウォー』だな。最初に俺たちが立つてた円形のスペース、わかるか？」

「うん！」

「あそこに味方が誰もいない状態で相手が入ると、そこがだんだん相手の陣地になるんだ」

「取られちゃうの？」

「そうだ。その代わり俺たちも、他のチームの陣地を取りに行く。そいやつて最後に一番陣地を多く持つているチームか、他の奴らを戦闘不能にしたチームの勝ち、っていうスポーツだ。まあちょっと色々難しいんだけどな」

アビリティ・ウォーは、この国で行われているスポーツの中でも、個性社会に合わせて新しく考案された全く新しいスポーツである。

基礎となつたのはこれまでのスポーツではなく、どちらかと言えばFPSなどの戦闘ゲーム。いわゆるドミネーションなどと言われるルールを人間がやるように発展させたスポーツだ。

他にもバトルロワイアルであつたりシンプルなチームデスマッチ（デスではなく、ダウンではあるが）は常駐のスポーツとして頻繁に行われているし、数十人規模どうしによるまさに戦争とも言えるスポーツもそれほど頻度は高く無いが相当の人気をもつて行われている。

特に年に2度開催されるオールスターゲームなどは凄まじい盛り上がりようだ。各スポーツのトップクラスが勢ぞろいするのである。日本などでは国がこのグリードアイランドの存在を広めることそのものを禁止しているのでほとんどの者が知らないが、ヨーロッパなどではそのオールスターだけは放送が行われたり、時にはプロのヒーローがやってきてはボコボコにされて帰つていつたりもする。

他にも中世の戦争を再現した攻城戦や屋外ではなく屋内で行われる制圧戦。半ばエキシビジョンマッチと化しているが、かつてのヒーロー映画を再現するシチュエーションマッチなども行われていたり。このように戦いに偏つたスポーツが多いかと思えば、バスケットやサッカー、野球など他の場所ではすでに失われたスポーツもリメイクされて行われている。特にバスケのようなスピード感のあるスポーツは個性の使用とマッチしているようで大人気競技の1つとなつていたりもする。他にも飛べる個性も飛べない個性もある程度差になりにくいように調整したレースも行われていたりする。

「見てて楽しいし、自分もやつてみたいだろ？」

「うん！ 私もヒューンつて行つてドカーンしたい！」

とても大雑把な感想だが、少女の頬が興奮で紅潮しているところを見ると本当に楽しかつたんだろうなと思って、スポーツをやっていて良かつたなんて思えてくる。

スポーツは、本当に良いものなのだ。見ても楽しいし。やつていて、体を限界まで酷使している瞬間のあのひりつくような感覚。樂

しくてたまらない。

そして競う相手。

相手もまた、勝つために全力を尽くし、常に成長を続けている。そんな相手とやりあえるのだ。楽しくて仕方が無い。

今回の滞在期間は夏休み期間の一ヶ月ほどのみだ。これでも日本で学生をやっているのだから仕方ない。まあ日本の食事はめちゃくちゃ上手くてこのグリードアイランドにも取り入れられているし、あそこのパスポートさえあれば各国に入りたい放題なので生まれた国籍は重宝している。じいちゃんばあちゃんも優しいし。

でも日本の個性に対する無駄な抑圧は正直言つて嫌いである。試合前に苛ついていたのも、出国前日にクラスメイトと会ったときにそういう雑談をされたからだ。スポーツよりヒーローの方が何倍も面白い、なんて。

失礼、愚痴はここまでにしよう。

明日はこっちでトップクラスのチームで活躍している親父と会えるので楽しみである。お袋は時差ボケで今日は寝てしまつたが、どうせまた会えばイチャイチャし始めるのだろう。

一ヶ月が終わって日本に帰ればまたスポーツから離れた時間を過ごすことになるが、一応個性の使えるトレーニングルームを報酬で作つたのである程度は暴れられる。

それにこの国のスポーツも年中通して同じことをやつているわけではなく、夏場は7月から9月までの3ヶ月。冬場はロシアの地方都市に場所を移して12月から2月までの3ヶ月がレギュラーシーズンとなる。ロシアはアメリカや日本と違つていち早くこの国を受入れ、なんなら自国のヒーローや軍人を派遣してきたり、あるいは優秀な選手を引き抜いていつたりするという、ある種同盟国のような状態になつてゐる。おかげで夏場は常夏の島国で、冬場は雪山や雪原でのスポーツを楽しめるのだからWINWINと言えるだろう。

その後少女を探し回つていたという母親らしき女性に感謝の言葉を言われながら少女とお別れをし、帰途に着く。

うん。今日も英気を養えた。

正直スポーツは、疲れる。そりゃあいくら楽しくても疲れるものは疲れる。

だが。

退屈な日々と比べれば遙かに良いし、大好きだ。その疲れすらが愛おしく感じる。

明日から、また試合三昧だ。出来ることなら、チームランクを1つでも上のリーグに押し上げたい。そして高校を卒業する頃には、親父のチームに挑んでみたいものだ。